

は後曳き付の、一瀉千里の猛勢。
 頓て麓間近くなりし頃には、車夫の足は殆んど地に着かぬ速力にて、風切る顔の息苦しき許り。折しも麓の方よりは先曳の汗ダクダク、上り来る車二輛。
 見れば前なる車には、呀！山城屋のお銀。偕はと胸轟かす間もなう、嗟乎後ろの車には彼の巫女のお作が、観念の眼を堅く閉ちて凄きまで蒼白めたる面を空に。凭れたる車の胴を押すは彼の渡守の太平爺なりき。
 狭き道を互に相譲りて、車と車の磨れ違はむとせる一刹那。不圖心注きて余を見たるお作は、其清しき眼に言はうやうなき愁情を泛べて、疾風の如く下り行く吾が車の、見る見る遠ざかるを名残惜し氣に見下しぬ。ふり返りく。

評 常選の作は文章は今一息と思はれる所もあるが、其想に何となく面白みがあるやうだ。これに次いで上出来なのは嵐花の「暑中休暇」で、文章は頗る巧であるが、

話しに妙味が少ないのは遺憾である。それから天二坊の「夜露」、山里の「つきぬ憂」、東風の「旅藝妓」、紫浪の「上等兵」、紅蛇の「白百合」等順次に品等すべきものである。

(蠡湖生記)

明治三十四年七月九日發行、「萬朝報」第二千七百九十八號所載、毎週募集懸賞小説第二百三十二回第壹等當選、ペンネームX字庵

宵月夜

一

奥座敷に隣りたる四疊半の書齋に坐を占めて、美しくしう種々の書籍を積み累ねたる唐木造りの机に半身を投げ掛け乍ら、未だ新らしき黒柿椽の角火鉢を膝許に引寄せて、煙管に挿したる巻煙草の先もて、灰に埋れたる火を探りつゝ又餘念もなき廿七八の色白男。身には大島紬の袷と英ネルの重ね着に、白縮緬の兵児帯無造作に締めて、隆く通りたる鼻の上に掛けたる金縁眼鏡は、チツク用ゐるまでもなく格好のよき八字鬚に能く似合ひて、涼しき眼許さへ縮りたる口許さへ、天晴れ女の羨まむ許りなるに、漆もて染めたらむ如き純黒な頭髪を、流行の刈込に櫛の目を入れたるなど、更らに數段の風采を増しつれど、さりとして心得ぬは毛虫の匍うたやうな

る濃き眉宇の間に、無量の愁情の籠りたる事なりけり。

やうく火の着きてか、白き煙は微風に揺めきて室内に覆けど、猶吸口に口當てむともせで、宛然白龍の天に沖するが如き煙の行く果てを、さも心細けにウツトリとなりて見詰めつゝ、暫しの程は他愛もなかりしが、頓て何思ひけむ周章しう巻煙草を抜き取りて、煙管をサツクに納めも敢へず、思ひ出したやうに手を敲けば、二間許り隔てたる表の方よりハイと細き女の聲して、疊障りもいと嫺けく、さらくと衣の音を先に立てゝ入り來りし廿餘りの婦人は、糸織矢絣の平常着に黒織子と友仙縮緬の晝夜帯輕やかに締めて、解いて垂れもせば裳にも届かむ許りの黒髪を、品の好き高髻に結ひて文金掛けつ。生え下りの富士額に雪のやうなるその色白さと言へば、假令七難隠さずとも、何處一つ點の打ち處とてなきに、見るから涼しげなる兩の眼許は、ふつくりと膨らみたる兩頬の深き笑靨とともに、無量の愛嬌を湛へて更らに幾層の風情を添ふる心地すめり。頓て室の申程に膝を折りて、無遠慮に片頬を掠むる鬢のほつれ毛を、ルビー入の金指銀篋めたる織細き持先もて五月蠅氣に撫で上げつゝ、美しき襟足を少し斜に見せ

て、ハイ何の御用で、と尋ねれば、男はふり返りさま見合せたる面を遽に背けて、書椽越に庭の樹立を眺めつゝ、オヤ民ちやんですか、憚ですが一寸僕の羽織を出して頂戴、と言ひつゝ、机の抽出より金側の懐中時計取出して兵児帯の間に挟めば、ハイと言ひしまゝ暫らくは男の横顔を見贈りたる後立ち上りて、次の間に行かむとする娘の後姿を、男は昵と目も放たで見送りつゝ、暫時は黙然として物思に沈みしが、何思ひけんほつと吐いたる太息と共に、數滴の涙は兩の眼より溢れ出で、端なくも膝を濡らしぬ。

程なうお民の持ち來りたる黒羽二重の紋付羽織を、男は一寸會釋して其儘無造作に着流しつ。黒の山高帽取るより早く何處へか出で行かむとするに、先程より傍へに控へて何事をか言はむとして躊躇ひ居たりしお民は、此時やうく口を開きて、オヤ今頃から何處へ行らつしやるんですか。もうあなた五時に間もありませんから、お夕飯でも召し喫つて……と額に小さき皺を造りて言へば、ウムナニそれでも好いが……と少しどきまぎ言淀み乍ら、だが一寸其處まで散步に行つて直ぐに歸つて來るよ。とやうく何氣なう言紛らせど、詞尻は甚く顛へて聞えぬ。

御散歩？ ではお早う行つてお出で遊ばせ。併し今朝程参つたお手紙の御容子では、どうやら叔母様も今晚の中にはお歸宅なさいませうから、それに又岡山の父も一緒に参るとの事故、旁兄さんがお在宅なさらなくては不都合で御座んせうからね。と誠心を面に現はしてお民の言ふを、男は能くも聞かぬ振して、ナニ直ぐに歸るよ。と言ひも終らで其儘玄關まで出で行けば、お民も詮方なく後追ひ來りて、お早うお歸りなされませ、と式臺に三つ指突いて送り出す聲を後に、木履の音もいつしか門外に遠ざかりて、果ては聞えずなりぬ。

二

暫時の程は玄關に坐りたる儘、立ち上らむともせで物思に沈み込めるお民の傍へ、臺所より出來りたる下婢のお清はいざり寄りて、お嬢さま、ほんにまあお察し申し升。エ、眞實に旦那様も餘りな爲され方。妾は腹が立つてなりませぬ。いくら變り易いは殿御の常とは申すものゝ、此春東京からお歸りなされた時のあのお優しい旦那様と、今日此頃のやうに御洞慾な旦那様と、

これでも同じお方で御座んせうか。ほんにく何と申して宜い事やら、只だもうお慰はしいは貴嬢とお袋様、嘸かしと御察し申し升。それに付けても面憎いはあの染吉とやら言ふ古狐奴。昔より浮河竹に沈める身は人を誑すが營業にて誠なき者と決つてあれど、餘りと言へば不義理な仕打。ならばあの畜生の面の皮、引剥いてやり度う御座んす。と下婢には惜しき丸ぼちや顔に、袖押宛て、泣伏せばお民も面を背けて、これお清、數ならぬ妾をそれ程に思つて呉れる。志は嬉しいけれど、そのやうな事言つて若しや他人様の耳へはいりでもせば何としやる。もうもろ必ずそんな事は二度と言つて下さるなや。と叱る身の心の中には涙や呑みけむ。さあそんなに貴嬢がお心弱い故、旦那様も好い事になされて、あのやうな事遊ばすのでござんす、何のお嬢様とした事が、人見て法説けでござんす。先方からして義理を缺いで参るのに、こちらが阿呆正直で義理を立てるやうな事では、中々此せち辛い世渡りが出来る物ではござんせぬ。お嬢様、寧ろ思切つてこう遊ばせ。とお民の耳に口寄せ何事かを密々と囁けば、お民は頭を俯垂れたるまゝ應へざるに、ねえお嬢さん、屹度そう遊ばせ。何の貴嬢、旦那様とてほんの一時のお

迷でござんすからね。と言ひつゝ首差延べて娘の顔を覗込み乍ら答を促せば、お民はやうく顔を上げて、だつてそんな事は妾に出来ないよ。まあ考へてもお呉れ、いくら兄様とお心易いからつて、あの松本様にそんな事が恥かしうて申されるものかね。それに叔母様も岡山のお父様と御一緒に今晚にはお歸りなさる事故猶更らそんな事は……。オヤ忘れて居りました。お清、お前御苦勞ながら最前頼んで置いた仕度を仕て置いてお呉れ。妾は今の仕事がもう袖付だけで終なんだから……と、思出したやう立上りて奥へ行くに、お清は後見送りて思はず涙を拭ひ、ほんにまあ彼の通りだから猶更お可哀想だよ。と言捨て、物と溜息を洩しぬ。

お民は吾部屋に歸りたる物の、縫差しの仕事には手も着けで、疊の上に散亂りたる新聞の挿書を俯向きて一心に見詰めつゝ、額を襟元に埋めたるまゝ物をも言はで、暫時は茫乎と物思に沈込みしが、樂しかりける過去方、心細けなる將來の事、儲ては吾身乍らに吾身の解らぬやうなる今日此頃の事など、萬態の物思は一時に胸に逼り来て心を惱すに、いつしか身神も疲れ果て、ふらくと氣拔せしやう覺ゆるかと思へば、又忽ち新聞も疊も障子も壁も、部屋中の物皆

一時に掻消す如く失せ果て、いつの間にやら天より舞下りたる一朵の紫雲は、吾身を乗せたる儘次第々々に下界を放れ行きて、遙かに高く御空に昇れば、兼て聞きつる桂の宮にてやあらめ、下界にては見るに由なき麗はしの園生の花の、美々しく咲き充ちたる花壇の前に立つて居りぬ。

三

吾身ながら餘りの不思議さに、暫時の程は茫然と立停りたるまゝ四邊を見廻し居たりしが、不圖後手の垣根に美しう咲き亂れたる白薔薇の、上を下に躍りつ、舞ひつ、飛び交ふ一雙の胡蝶を指しつゝ双方より互にすれくになるまで靠れ合ひて、さも睦じ氣に語合ふ男女連の姿を見ては、はしたなくも何となう羨ましく思はれて、進むともなくつひ其傍へ近寄りて差覗けば、どうやら見覺のある男の横顔！ オヤッ貴郎は兄様ツ、と吾を忘れて駈寄りざま縋り着けば、只だ一言の下「知らぬ」と刎ね付けられ、こは何とせんと思ふ間もなく男女は後をも向かで遙

かの奥庭へ連れ立ちて足を運ぶに、後追はゞやと必死と爲つて身を藻掻けど、急燥れば急燥るほど、なほ足すくみて思ふやうならぬ儘、一時に騒ぎ立ちたる胸の血にツイ取り逆上せてか、又ふらくと眩暈せしやう覺えて暫時は正躰もなかりしが、頓て目の覺めしごと我に復つて正氣付けば、身は原の座に坐りたるまゝ差俯向き、背のみ甚く濕うて居にき。

いつの間に暮れ初めけむ。夕陽影を浴びて梢を染めたる奥庭の大榎に、群れ集ひて罽を争ふ雀の聲々喧しく、婆娑と音立てゝ木の葉を吹落す秋風は、何となう肅殺の氣を含みて容赦なう面を掠め行くに、お民は意はず身を顛はせて、周章しう縫物取片づけむとせし折しも、表の潜戸に仕掛けたる呼鈴の音チリ、ンと響きて人の入り来る氣配せしが、程なく後の襖紙越しにお清の聲して、お嬢さま、松本様がお出でなさいましたよ。丁度願うてもない結構な事ですから、必ず最前申した事お願ひ遊ばせや。屹度都合能う御座んせうから。と言ふに、オヤそう、ではいつものお座敷へお通し申してお呉れ。妾は直ぐに御挨拶に出るから。といひつけ乍ら部屋の片隅に立てる衣桁より、田舎銘仙の書生羽織外づして袖を通しも敢へず、紐結びつゝ出で

行く廊下の曲り角に、黒紋附の羽織着流したる三十路に近き鬚男と碯と出逢ひぬ。

オヤ松本様、ようこそお光来下さいましたね、サアどうかこちらへ。とお民は先に立ちて奥の客座敷に通しつ。正座に請じも敢へず座蒲團火鉢など下婢の手より取次いで勧め乍ら、互に一と通りの挨拶終れば、安田君はお留守だそうです、何處へ行つたんですか。と巻煙草燻らしつゝ客の問ふに、お民は茶盆引寄せて笹舟形のゆさましに鐵瓶の湯を移しつゝ、ハイつひ先程散歩に出掛けましたが、もう程なう歸りませうからどうぞ御ゆるりと、言差して急須の茶を汲むで差出しつ。時にお宅の姉様も其後ち格別のお變りは御座りませぬか。一度お伺ひ申さねば濟みませぬ筈なれど、御承知の通り先日から叔母が岡山の方へ參つて、留守中でムんすのでツイ心ならずも御無沙汰を……と言續けむとするを客は遮りて、イエどう 仕りました、御無沙汰とは手前よりの申條なれど、他人行儀と存じて差控へて居りました、家内も一度お邪魔に上り度いやう申し居りましたなれど、何分御存知の身躰故どうか今暫らくは失禮を。と少し詞を切りて、さる代り來春までお待ち下されば、玉のやうな美しい坊様を抱かせて進ませます程に、

必ずどつさりとお祝を仕て下さいますやう、前以てお願ひ申して置きますよ。と鬚の先頭はせて笑へば、其御自慢なれば姉様より承るべき筈。あなたばかりのお手柄でもムんすまいに、餘り口はゞたき事仰しやいますな。とお民も思はず釣込まれて頬笑み乍ら言へば、そんな事仰やるからは貴嬢の懐妊にも思ひ限り安田君の肩を持つて酷う苛めませう程に、屹度覺えてお居でなさいよ。と客は言終りて哄と笑ふに、アラ御冗談を、とお民は極り悪る氣に言放ちて周章だしう面を背けしが、置洋燈の光は意地悪るくも賑らめたる半面を追うて照らしぬ。

四

一と連り笑ひ終りて後ち松本は、思ひ出したやう巻煙草を捨て、膝少し押進め、時にお民さん。貴嬢は定めし御承知でせうが何故安田君は病院を辭職たんですか。實は今日突然院長から其由を聞いて餘りの意外さに驚いたやうな事で、一度安田君に會うて篤と其理由を聞かうと思つてお伺ひ申したのですが、貴嬢も知つて居らつしやる通り、僕と安田君とは東京の大學に居

る頃からの別懇な仲で、今年の春一緒に卒業してからも、御縁と申そうやら又同じ病院勤務に毎日顔合して居ると言ふ次第ですから、僕は常々失禮な申分乍ら血を分けた兄弟同然に思つて居る故、何事に由らず互に打解けて相談し合つて居たに、今度の辭職に限つて些つとも沙汰がなかつた物だから、どう言ふ譯か薩張不思議で堪りませんが、全株安田君はどうする決心でせうかね。と熱心なる語調にて問掛けられ、お民は遽に手に持ちたる急須を下に置いて、アラ松本さん、そりや眞實でござんすか。と目を圓うして問返せば、オヤ貴嬢は未だ御存知でござんせぬの？ と意外らしう松本の答ふるに、ハイ些つとも存じませぬのですよ。眞實にまあ兄は辭職致しましたのでござんすか。と呆れ返つたやうなるお民の詞付に客も眉を擡めて、ハイ全く左様で。それに醫學校の方も共に辭職たやうですが、ハテどうしたと言ふんでせうかね、貴嬢にも だ言うて居らない程なれば、勿論御歸省中のお袋様へも相談して居ないのでせうか。と訝かしげに客の小首捻るを、お民は又問糺さむ勇氣もなく胸のみいと轟き渡るに、其儘首俯垂れて疊を見詰めたる眼元には、いつしか涙の露の宿りぬ。

ですがねお民さん。安田君とて素よりあの通り至極律義一遍の性質です故、まさか馬鹿氣切つた無分別な所爲も仕ますまいから、餘り御心配なさいませぬ。ナアニ辭職したのもあの才子の事だから何か他に良い口を見付けたんでせうよ。實際又病院通ひも随分好い加減に詰らない職業ですからね。併しお袋様は何日お歸宅なさるんですか。と譯もなげに松本の尋ぬるに、お民も少しく胸を鎮めて、ハイ有難う御座います。叔母は今晚中に妾の父と一緒に歸ると今朝ほど手紙が参りましたから、何れ九時の汽車になるだらうと思つて居り升。と言ひて口を嚙めば、今晚？ ではもう何です今頃は汽車の中ですね。僕は貴嬢のお父様には未だお會せんですが、何れ明日はお伺ひ申してお目に掛りませうから、どうか宜しく申上げ置いて下さいよ。と言ひつゝ、帯の間より金時計取出して一寸時間を眺め、額に小皺を寄せて、併し遅いね安田君は。散步文に行たんでせうか、何處かへ廻つたんぢやありませんまいかね。と言はれてお民は少し口籠りつ。イエナニもう程なう歸りませうが、ほんにまあお待せ申してお氣の毒様ですね。とやう言終りたる折しも、次の間へ來りたるお清は手を突きて、あのお嬢様、只今松本様の初藏

(車夫の名) どんが、何かお宅に御用がござんすそうで、旦那様の御迎ひに参つて居らつしやいます。と言へばお民の答ふるを待たで松本は、オヤ憚りさま。一寸暫らく待たせて置いて下さいよ。と言ひて、ハイ長りました、と言捨て、出て行くお清の後姿を見おくりつつ。お民さん、と少し詞を改めて膝押進めぬ。

五

ハイ何でござんす。とお民も改まりて視線を松本の面に注げば、いつも此人の眞面目の時の癖と聞ける、濃き兩の眉根をビク々々と二三度動かして松本は、貴嬢も定めてお氣に懸る事がござんせうが、安田君と僕との交情を御存知なれば決して御心配遊ばすな。安田君の此頃の御容子に就ては僕にも頓と合點が参らねど、何かこれには深い仔細があるんでせうから、及ばず乍ら僕の身で出来る丈の盡力をして、必ずお嬉しいお咄に致しませうから、ねい宜しいか程度お禮を願ひますよ。ハ、ハ、ハ、ではもうこれでお暇しますから、安田君が歸つたら宜しく仰し

やつて下さい。と言終り、失禮しました。と言捨て、立上れば、まあ貴郎飛んだお粗勿で失禮致しました。それではどうか姉さんにもお宜しう仰しやつて下さいませ。と言ひつゝ門まで送れば、大きにどうも。と會釋して其儘人力車に乗りたる松本の姿は、地上に印せる轍の跡と共に、いつしか暗の中に消え行きぬ。

お嬢様、どうでムんした。都合好うお咄しなさいましたか。と松本の歸りしと引ちがひに、臺所より飛んで来しお清は、式臺の上に洋燈を持ちたる儘、茫乎と木偶のやうに突立ち居れるお民の肩をちよいと押して尋ねれば、お民はやうく氣注ぎて驚き乍らふり返りて、アラお清、何だねえ騒々しい、妾や吃驚したよ。といつになう慳貪に言放ちて玄關へ上るに、お清は急ぎ込みて、お嬢さま、妾が最前申上げたる事を松本さんにお願ひなされましたか。どう遊ばしましたへ。と詰め寄りて尋ねるを、イ、エあの様な事は妾や恥しうて得願はなかつたよ。と物懶けに答へたるまゝ奥の間に行くお民の後姿を、お清は目を圓うして見送りぬ。

X X X X X X X

安田さんおほきに。と障子を明けるなり先づ聲掛けて、さも馴々しく其傍に坐り寄りたる廿位の高島田は、男好のする瓜實顔に滴らん許りの愛嬌を湛へて嫣然と打笑みつ。繻珍の帯の間より小形の眞入取出して、雛祭の道具の様な小さき銀煙管に煙草詰めつゝ、ほんに今日はどうした風の吹き廻しやうか、お珍らしいお顔を拜みますね。安田さん、悪性も好い加減にお止し遊ばさないと罪でムんすよ。と一寸睨む眞似して、やうく吸付けたる煙管を男に手渡しつ。ねえお繁どん、そうじやムんせぬか。と空徳利持ちて立ち上らむとせる仲居に話を向くれば、そうで御座んすとも。ほんに安田さんには澤山奢つて頂かねばなりませんよ。あなたが過般中から浮氣遊ばす故、此染吉さんからそれはく酷い疳癩玉を食べさせられたのですよ。眞實にちとたしなんで頂かないと、妾共が堪つたものじやムんせぬと、笑ひながら甘く合槌打つて出で行けば、何を馬鹿な、と客も笑ひ乍ら言うて、呑み差しの羽觴を乾し明け、さあ奥様にお一つ行かうかね。と差出せば、オヤ妾に、有難うさま。と嬉しげに受取り、一と口呑むで下に置きて、安田さん、眞實に貴郎は罪なお方でござんすよ。いつもく騙されると知りつゝ、貴郎

が御冗談に仰つしやる氣休を眞に受けて、妾やホ、ホ、眞實で御座んすよ。

六

あら何でござんすと、エ、知りませぬお口の悪い。何となりと仰しやりませ、どうせ妾は此通りの三平二満でござんすからね。お宅のお嬢様のやうに容姿が好うござんせぬからね。お氣にも召しますまいよ。エ、ッ悔しい。と言ひつゝぐるりと男の方に背を向けてツンと澄し込めば、オヤオヤ怖い事だね染吉さん。イヤサ奥様そんなに辛らく當らないでも、正可旦那に義理は缺けますまいぜ。併し僕は素より野暮で氣障だからね。と言ひ差して酒盃を拾ひ上ぐれば、あらまだそんなに……、其御酒は吞ませませんよ。と女の又向き換りて膝押進めたる折しも、銚子片手に入り來りたるお繁は、お止しなさいよ染ちやん。やもめは世間に澤山居りますからね、もうそれで澤山ですよ。サア旦那様お一つお熱いのを。と言ひつゝ銚子差出して並々と注げば、オヤお繁どんまでが同じやうに、アイ宜しうござんす、屹度覺えてお居でなさいよ。と

染吉は眞面目になりて白眼む眞似するに、オウ恐い事ね。とお繁は故と不態に首を縮めて腹を抱ふれば、續いて客も女も哄と聲を合して笑ひ興じぬ。

頓て再び座の静まりたる時、お繁は思ひ出した様に詞を改めて、あの先刻のお手紙を持たせて松本さんへ遣りましたらね、生憎お留守なんだそうで其儘歸つて参りました故、是非々々至急の御用なんだから、お行先を尋ねてなりともお目に掛つてお届け申すやう厳しういひつけて又只今やりましたよ。と眞面目になりて言へば、オヤそれは憚りさま。と答へたるまゝ安田は少し眉を擧めて小首を捻るに、あの中町の松本様が入らつしやるんですか。と不意に口挿みたる染吉の面は、いと不興氣に見請けられぬ。

掛聲勇ましく軋らせたる車の梶棒下す音して、門口の格子戸の明く音と共に、先づ女將のふり撒く愛嬌笑賑はしく聞ゆるに、オヤ松本さんが入らつしやつたやうですね。と言捨て、立上りさま、お繁は急がはしく階下へ降り行くに、ほんにどうやら松本らしい聲だよ。と言ひつゝ、安田も坐り直せば、妾はあのお方に逢ふのは何だか……、と染吉は浮かぬ顔付にて極り悪るげ

に言ひつゝ、もちく／＼せる間にトントン段階子を上げる登音して、此室でござんすよ。と立降りたるお繁の聲と共に、障子押明けて松本は入り來りぬ。

オヤ安田君、御愉快筋だね。これはく／＼何處の辨財天かと思へば染様か、お安くないね。中々按摩膏位では我慢が出来ないよハ、と室一杯に響くほど笑ひながら、松本は火鉢を隔てて安田の隣へ坐れば、ヤア松本君能く來て呉れたね、サア駄付三杯だよ。と安田は寂し氣に笑ひつゝ、盃を獻せば、これはどうも。と右手に受けて、染吉の何となう澄ぬ顔付にて酌するを尻眼に掛けつ一息に呑み乾して、サア御返盃だよ。と安田に獻せば、まあ今一つ重ね給へ。と強ひられて又半ば呑み差し一寸下に置いて、僕は先程から船越町へ行て君を待つて居たのだが、急に宅から呼びに來た物だから、失禮して歸つて見れば……だよ、だがまあ好かつた。と言終りて呑み乾したる盃を安田に獻しつゝ、昵と顔を見詰れば、何思うてか安田は面を背けて、染吉とお繁の兩人に目配して座を外させぬ。

七

後は遽かに大風の風ぎたる如く沈まりかへりて、兩人はしめやかに密々と打語合ひつゝ、時深き溜息の四邊の寂寞を破りて洩れ聞ゆるのみなりしが、頓て鼻噓りたる後ち松本の聲して、イヤモウ僕は何だか氣が漢乎として譯もなく心細いやうな變な氣持になつて仕舞つた。眞實に全然夢のやうで更らに誠とは思はれぬが、ア、どうも是非がない。實に君が胸中はお察し申すよ。併しまあ能くこそ言難い一身上の大事を打明けて相談して呉れた、これでこそ深く契つた友達甲斐があると思へば僕は嬉しいよ。東京で不圖した縁から同宿してより二年が間は、同じ學校の同じ級で勉強して、此春一緒に此地へ來てからも、又同じ病院へ出勤すると言ふのも、此淺からぬ宿世の因縁と思ふ程に、僕は實に君を唯一の親友として、骨肉の間柄よりも猶更ら力と頼んで居るのだから、實に其様な事を聞くと、現在吾身が其逆境に沈んだよりも悲しい思がする。けれども僕は堅く安田三郎君と交を盟うたのであるから、互に現世に在らん限り

は、假令互の境遇がどうならうとも、何處迄も其交情を繋いで、いつくまでも變らない積りだから、決して其邊の處は懸念して呉れ給ふな。あゝいかに辛らきは浮世の習ひとは言ひ乍ら、さりとは人も多いに……病も多いに……後言差して吻と太息を吐けば、いとさびたる安田の聲の頼へて續きぬ。松本君。僕、僕はもう何も言はぬ。有難い忝けない。天にも地にも世にも人にも見捨てられてか、此病を發して人間の資格を奪はれたる僕は、實にもいかなる前世の罪業かは知らねど、ただもう現世と言ふものは、頼むに足らぬ果敢ないものと思詰めて居たが、樂しき昔に露變らぬ君が、志許りは實に嬉しい、生涯忘れはせぬ。未だ君には咄さなかつたが、此六月頃に君も知る通り暫らく須磨へ出養生して居つた其間に、初めて此病の徴候を發見したので、其後といふものは餘りの意外さに、ただ茫乎と夢のやうな心地がして何事も手に着かず。獨り胸を痛めて夜となく晝となく煩悶してゐる心の中を少しも察して呉れずに、母が一日も早く民と結婚せよと急ぎ立てゝ、間がな隙がな責め付る故、君の前だが僕とても木石ならぬ身の物の哀れは知つて居るし、殊に民とは幼い頃よりの結髮中なれば、一入いちらしうは思へど、

一時暫しが程の情は却て將來久しき仇となる事なれば、心ならずも詞を左右に托して言紛らしつゝ一時遁れにやうく辛らき日を送つて居たが、母の次第に嚴しき詞に今は絶體絶命の窮策として此遊廓に足踏み込み、表へには面白可笑しく浮かるゝ物の、心の中の苦しきはいか許りぞ察して呉れ給へ。と男泣に獻けければ、松本は更らに熱したる語調にて、イヤ尤じや。實に道理じや、僕はそ言ふ内情を知らない故、ただ一途に君が普通一般の放蕩を仕始めたものと信じて、只管心配して居たが、いづぞやも君の母君が宅へお出でなされた時、家内が妊娠の咄から非常に君の事をお悔みなさる故、僕も眞に御心中さこそとお察し申してお氣の毒で堪らず。色々とお慰め申したが、其後ち段々君に忠告して試ても一向に用ゐて呉れないから、四五日前に噂に聞いた染吉とやらいふ女に逢うて、段々事情を打明け因果を啣めて、呉々も君との關係を絶つて呉れるやう頼み込んで歸つたが、誠なきは此社會の常か、どうやら聽いて呉れなかつたやうだ。併し今聞いた君の決心もこんな場合には仕方ない事であるが、最前お民様に聞けば、九時の汽車には多分御母堂も岡山の伯父君と一緒に歸らるゝそうだから、兎に角九時

と言やモウ程もない事故、一と先づ宅へ歸つたらどうだらうね。と言終りて安田の様子を窺ひぬ。

八

安田はいとも沈める調子にて、それがね君。能くまあ僕の身になつて考へて呉れ給へ。これが僕丈の身が癩つて濟む事なれば、何の此様な術ない思ひをして苦勞せうや。何も彼もすつかり母や伯父に打明けて仕舞つて、天命では是非ない事だから、諦められもし諦めもせうが、吾身の此病症が今半歳も経つて人目に掛るやうならうものなれば、其時こそは一大事。吾身は愚か親同胞、偕ては先祖親屬にまで疵付けるやうな事なれば、どうしても僕の身は此儘に捨て置かれないから、斷然先刻言うたやうな手段を施す積りなんだが、此事は僕丈の胸に持つて居りさへすれば、假令世間から親不孝の無分別者のと譏り笑はれうとも、僕一人の恥辱で濟む事故、定めし母や伯父は此真相を知らないで、怒りもせうし悔みもせうが、打明けて更らに今一層の

心配を掛けやうよりは遙かに孝順の道と考へるから、僕は何處までも此儘表面上の不孝者になつて仕舞ふ積りなんだ。だから今夜歸る母や伯父に逢はないで、此儘暫らく此樓で流連の放蕩に愛想を竭かされて、涙を呑んで勘當されて、そして例の處へ行くとすれば實に安心して行かれやうから、どうか君、其邊の處を能つく察して、僕の宅へ行つて母や伯父に逢うて、散々僕の事を悪様に吹聴して呉れ給へ。其方が都合が好からうから。と情に激してかいとど詞尻を顛はせて言終り涙を啜れば、松本も意はず歎息して、暫時は無言の儘にて思案に暮れて居たりしが、頓て遽に顔を上げ、だがね安田君。それでは却て不可ないだらう。それよりは矢張今夜の處は一と先づ歸つて、母君や伯父君に逢つた上で何處迄も辭むだ方が好からうと僕は思ふよ。どうせ今度伯父君の來られるのも、結婚の一條に決つてるからね、そりやもういくら君が堅う決心はして居ても、面と對つては人情として随分言難い事だらうが、言はゞ此所が一番大切な處だから、何處までも強硬手段を取らなきやならないよ。併し若し話が段々面倒になつて來た時には、好い加減に其場を外づして僕の宅へ通けて來給へ、そうすりや僕が直ぐに君の宅へ行

つて、誠に母君や伯父君にはお氣の毒だが、涙を呑みつゝ離間策を施して、見事君の望を叶へて見せうから、後の處は僕に任かして兎も角も歸り給へ。と言ひつゝ時計取出して、オヤもう九時前になつたよ。さあ君はどうする。愈々そうするとすれば一時も早く歸宅つて、先に待ち受けて居る方が宜からうからねエ、と言へば安田は、首俯垂れたるまゝ昵として居たりしが、不意に勃乎と面をふり上げ、ではどうも仕方がない。實に身を斬られるより辛らいが斷然そうするとせう。が何分此後ともに倚頼に思ふは君許りだから、どうか宜しく頼むよ。と決然と言放ちたる詞は、甚く寂しげに澄み返つて聞えぬ。

まあ貴郎方お宜しいじや御座りませんか。未だくお早うござんすから、今少し位はおるで遊ばしても、お宅の御首尾に關るやうな事はござんすまいに。と右左より頻りに止め立つる袖ふり切つて立出でし安田松本の兩人は、門口より車に乗りて、東と西に袂を分ちぬ。

九

吾家ながらも胸に憂愁の絶えせぬ安田は、低き闕も高く踏み越えて門内に入れば、オヤ、お歸り遊ばせ、大層暇取りましたこと。何處かへ廻つて居らつしやつたのですか。と停りたる車の音を聞付けて内玄關まで出迎へたるお民が、片手に洋燈を持ちたるまゝ、男の傍に寄り添うて問掛るを、安田は五月蠅氣にただ頷くのみにて、物をも言はで己が書齋へ行くに、お民も其儘後に随ひ來て男の坐りたる前へ角火鉢差出し、半ば灰に埋れたる火を掻き起して炭次ぎ加へつゝ、貴郎、お夕飯を召喚りますか。と俯向きたる男の横顔を、濡みたる眼に竊と覗き込みて言へば、男は素氣なく、イヤもう要りませんよ。と纒に答へて又口を結ぶに、ではお茶でも入れませうね。と言捨て、臺處の方より取り來りたる茶盆の用意しつゝ、二三度口籠りたる後やう／＼意を決して、兄様、あの先刻松本様がお光來なさいまして、暫らく待つて居らつしやいました、お宅から迎が参りましたのでお歸りなさいましたよ。と言ひつゝ茶碗差出して顔覗き込めば、ウムそうですか。と軽く答へたるまゝ、いつもなれば喫むべき筈の卷蓆入には手も着けで首捻るに、何となう張合の抜けしが、又思返して少し膝押進め、貴郎は今日病院も醫學

校もいつしよに辭職あそばしたさうですが、そりや本當でムんすか。と少し聲顔はせて問詰れど、左程氣にも懸けぬ振にて一寸面を上げ、オヤ貴嬢には未だ咄さなかつたかね。此頃少し感ずる處があつたので、今日兩方とも辭職願を差出しましたよ。と安田は何氣なう答へて、跡は又堅く結びたる唇を開かむともせず。

「貴嬢には未だ咄さなかつたかね」とは何たる仰せぞ。餘りと言はゞ他人がましきお詞ならすや。假令行届かぬ妾がお厭なればとて、祝言せぬまでが血を引きたる從兄妹中なるに、さりとは辱きお心かな。妾とても一旦卿に見捨てられしからは、更々未練もなければ、又思ひ出せば口惜しからぬに非ず。言ふも無益の愚痴ながら、また世事も解らぬ振分髪の前より、末は背と呼び妹と呼ばれむ許嫁と聞けるものから、無邪氣中にも何となう、卿戀しく懐かしき心地して、果ては折に觸れ互に顔赧むるやうなりたる頃には、修學にとて卿は上京せられしが、日毎此家の叔母様と指折り數へて六年が間、待ち詫び居たる其甲斐も、嬉しき櫻咲ぬる今年の春、醫學士の肩書に、見かはす許りの殿御と變らせ給ひて、美しき鬚まで黒々と生やし給うて

お歸宅なされし時の妾がうれしさは、抑も幾何許りなりしと思召し給ふぞ。其當座の一月二月は、卿もありし昔に彌増さる優しきお詞もていつくしみ給はりしかば、ただく嬉しく楽しくとのみ他愛もなく思詰め居たりしに、忘れも得せぬ五月雨の降り初めつる頃より、思ひ掛なくも卿に酷しき熱出でて、腹部一面の腫物さへ出来たりければ、其月の初めよりお勤めなされし病院も醫學校もお欠勤なされて、須磨へ出養生なされしが、いかにお手の物の職掌柄とは言へ、一度松本様に診察をお願いなされては。と看病に枕元離れぬ叔母様と妾が、御容躰の良からぬに氣を揉みて、様々にお勤めせしかど、如何なる故にや一向にお聞入なかりしかば、何卒格別の事もなかれかし。一日も早く御恢復遊ばすやうと、心の中に神佛様へお願ひ申した甲斐あつて、程なく原のお身躰にお治りなされし嬉しさに、やうく胸撫で下し眉開きたるも仇なれや。其後とし言へば宛然別人の如く、以前とは打て變りし冷たきお素振。

十

つやく合點行かじと心を配りるる程に、専ら悪所通ひに憂身を憂さるゝとの忌はしき世の風評は、いつしか卿が面を蔽ひたる愁霧と共に、日毎にいや増さる許りなるに、氣遣はしくも亦悲しくて、折に觸れてはそれとなう言ひ出でて、顔色覗きたる事も屢々なりしかど、其都度いよく忌はしき面の愁霧の増すのみにて、終には宅さへ明け給ふ事すら一夜二夜にあらざれば、獨りくよく胸を痛めしが、思は同じ叔母様とても、一方ならぬ御心配にお氣を惱まされ、屢々人無き夜半に密々と涙ながらのお話もありしが、あはれお年召されし身に、斯かる憂き思ひをさせ申すも、皆妾が行届かぬ故と思へば、一入お傷はしく、様々に詞を盡してお慰め申しつゝ仇し月日を送りしが、先日叔母様が岡山の妾が實家へお越しなされてよりは、更らに卿は不興氣に面の曇り行くやう思はれ、借ては遽かの此辭職沙汰……素より女の身の、御相談に預らうなどとは思ひも寄らぬ事ながら、さりとは他處々々しや「未だ咄さなかつたかね」とは何處までもお情けなき仰せやう。エ、勿躰なけれど寧そお恨めしや。とお民は女心の一筋に思詰れば、いつしか胸も一杯になりて、果ては堪らず俯伏したる儘、堪らへくし溜涙を一時に

ハラハラとはふり落せる折しも、俄に門口に車の停る音して、續いて呼鈴の響は格子戸の開く音と共に、四邊の静寂を破りて聞えぬ。

今まで前裁の草叢に鳴き立て居たる鈴虫の音を礎と止めて、男女は急はしく玄關に出づれば、豆絞の手拭もて額の汗拭ふ兩人の車夫の手より、革盤風呂敷包肩掛など順々に取次いで、洋燈置きたる式臺の上に、行儀能く列べ立つるお清の横手に立ちたる五十路に近き婦人は、茶色羅紗の被布の袂より財布取出し、車夫に賃金を與へてふり向きさま、今戻りましたよ、と言へば、これは叔母様お歸りなさいませ、大層遅うなりましたね。随分汽車の中ではお寒むうござんしたでせう。オヤお父様お光來なさいませ。と愛想好く迎へたるお民の後手に、つくねんと立ちたる三郎は重ねなる口調にて、お歸り。これは伯父さん能うこそ、さあどうかお通り下さい。と言へば、庭の片隅に獨逸トンビ着たる半白頭の男は、一寸會釋して、ヤア三郎、又御厄介に参りましたぞ。と太き聲して無遠慮に先に立ち、奥座敷へ通り行きぬ。

X X X X X X X

フム成程そうか。だがね三郎。只だ少々理由があつてと丈けでは一向に譯が解らないよ。ねいお品さん(三郎の母)、己なども竹の子だが、醫者ちう開けた看板を掛けて居る丈に、強ち生れ落ちるとの天保氣質許りでもないさ。決してお前に嫌味たつぷりに御馳走する譯じやないが、一旦死んだ弟と約束は仕て置いたものゝ、偕てお前が好かぬ民をば強つて女房に持つて呉れろとは希はぬ。が物にはそれ／＼筋途と言ふ物を立てなきや可けないよ。これが子供同士の冗談と言ふでもあるまいし、言はゞ人間一生一度の大切な事を、そうただ雑作なく食つつけたり放したり、竹細工のやうな事が出来る物かね。そうだらう。だからお前だつて満更馬鹿な考を持つて居るのじやあるまいから、實は云々の譯があるから厭じやと思ふ丈の事を打明けて言うて呉れたなら、己だとして血を分けた甥といふはただ一人限りのお前だもの。死んだ弟への義理としても捨て置きはせぬ。随分恩愛の羈絆を放れて親身の相談にも乗らうから。エ、三郎。黙つて居ては解らんじやないか。と半白頭を顛はせて、一句々々語尾に力を込めつゝ、敷きたる坐蒲團をも迂り出さん許り、乗出して伯父の言へば、傍に坐り居たる茶釜の母も、堪り兼ね

て詰め寄りぬ。

十一

これ三郎や、其方は全躰何と思つてそんな譯の分らぬ事をお言ひなんだへ。まあ能く考へても試たが可いよ。妾は不仕合で良人に死別れてから、今日が日まで十餘年の間といふものは、ただく此兄様と其方とを、杖とも柱とも倚頼に思つて一日も早うお前が學校を卒業して、お民と一緒に睦じう暮して呉れるやう、待つてく待暮した甲斐も、やうく此春お前が目出度う卒業して歸つて呉れたので、重荷を一時に卸したやうに、やれくと胸を撫でる間もなう又其方が病氣、それもまあ有難い事には直ぐに本復したので、此上は一日も早う祝言させねば妾の役目が未だ済まぬ事故、其方にも度々催促したが、どうしたといふものやら、病氣から後ちは其方がコロリと以前とは打つて變つて……鬱ぎ込む許りなので、全躰婚禮はいつするんだへと強つて尋ねれば、ヤレ未だ早い、來年まで待つて呉れのと、妾が百まで生延びて居ても足

らぬやうな裕りとした、頓と埒が明かぬ返事なので、もう此上はと辛抱し兼ねて、御迷惑乍ら此兄様にまでわざく御苦勞を願うたのだから、今度といふ今度こそは、どうでも瞭とした返辭を聞かなきや得心が行ないよ。サア三郎、ようく後先の事を考へて返答してお呉れ。と詞劇しく問詰れば、其前に悄然と兩手を組み坐りたる儘、首俯垂れて黙然たりし三郎は此時俄に頭を掻けしが、深き決心の色はいつしか眉の間を閉ぢ込めし愁霧を拂ひ去りつ。いと清々しき面地にて、ハイ誠にこれまでは段々と御心配を掛けまして済みませなんだが、少し目的がありますので、來月五日神戸出帆の南洋丸に乗つて濠州へ渡航する事に決心しましたゆゑ、病院も醫學校も今日斷然辭職致しましたといふ次第ですから、甚だ氣儘を申して済みませぬが、どうか残念乍らお民さんとの縁談も、全く無き縁と思召の上御破談に願ひ度うござります。と少しも應せずキツパリ言放てば、エ、なんとと言やると眼を圓うして吾子の顔を穴の明く程見贈る母。意はず小首を傾けたる伯父。互に暫らくは無言の儘にて、前庭に鳴き立つる虫の聲々、今更のやうに耳へ入りぬ。

伯父は頓て膝を進めて、成程お前も一旦そう堅く決心した以上は、己も亦強ひて止め立はせぬが、併し外の事とは違うて一身上一家上の一大事であるから、猶篤と詳しい譯を聞きませう。が全躰濠州とやらへはどんな目的があつて行く積りなんか。又其處へ行けばとて何故民と夫婦になる事が出来ないのか。其邊の處を得心の行くまで詳しく咄して貰ひ度いね。と詰め寄れば、母も堪り兼ね、ほんにそうでござんすとも。其方はまあ何とした事を言ふんだへ。飛んでもない、其方の身體は其方一人の物ではないよ。それに其方のやうな無法な事を言うて、御先祖や兄様や此母をどうする積りなんだへ。と兩の眼を濕ませて言へば、サア其理由は誠に濟みませねど、只今此場で打明けて申上る事は、少々都合があつて出来ませぬ程に、いづれはお解りになる時もありませうから、どうぞ御勘辨を願ひます。と昵と洋燈の火影を寂し氣に見詰めつゝ言終りて、密かに低き吐息を洩せば、何思ひけむ母は遽に聲鋭く、これ三郎。

十二

これ三郎、其方が行く濠州とやらいふところには、色の白い美しい顔の、人誑す動物が澤山棲んで居る處であらう。エ、屹度そうであらう。イヤモウ其方が其精神なればそれで宜しい……何も言ひませぬ。畢竟其方といふ者があると思へばこそ、泣いたり怒つたりもしたが、もう二度と再び其方のやうな不孝者の人非人には會はないからそう思うて貰ひませう。顔見ても胸が悪い、エ、腹が立つ。と激昂したるまゝ、さも悔し氣に言放ちて其場に泣伏せば、胸の中にて双をふり廻はさるゝよりも辛らき思ひに、昵と拳を握りて無念の涙を呑み込み居たりし三郎も、今は堪へ兼ねて、エ、ツ寧その事何も彼も此場で……と急ぎ込みしが又思ひ返せば、今此場にて一時の残念さに怵え兼ねて打明けもせば、今日までの艱難辛苦も皆水の泡と消え去る事故、こゝぞ辛抱の仕どころぞと、溢れ出でむとする血の涙をちつと呑込みく堪へ忍ぶ。心の中ぞあはれにも又あはれなり。

併しまあこんな事は、そう厄鬼く〜と性急な事を言うても可けないから、三郎も猶今晚中篤と勘考した上で、更らに明日でも愈々かうだと言ふ處を聞かせて呉れ。其返答を聞いた上で己にも少々所存がある事だから。先づ〜今晚の處は、もう大分更けても来た事故、此儘にして裕りと臥せるが宜からう。と伯父が口挿み呉れたるを機會に、それでは猶一應篤と熟考しました上で、明朝お返辭致しませう。と言捨て、三郎は、己が部屋へ歸らむと立出でたる次の間に、袖噛み締めて泣仆れ居るお民が姿の、端なくも眼に入りて、烈しく胸躍らせぬ。

疲れし儘に臥床に入りて臉を合したるもの、三郎が五尺の身體一杯に滿ち〜たる物思ひは、次第に夜の更け行くに連れいや増りて、千々に碎けては麻のやうに亂れつ。吐息溜息は續け様に洩れ出で、搔撈らるゝ許りの胸の中には、心臓の鼓動のみ絶えず轟き渡るに、吻と又もや吐きたる太息と共に、寢返り打つて牙え渡りたる兩の眼を開けば、枕元に立ちたる有明行燈の火影は、いと心細氣にゆらめきて居ぬ。

ア、いかに歎くも詮なけれど、實にも情けなきは此病かな。よしや死なねば治らぬ病たりと

も、その病も多かるに、厭はしきが中にも殊に忌はしき癩病の此身に發生るとは。覺えなければ、前の世に如何なる罪をか犯しけむ。知行高なら家柄なら岡山藩の中にも先づ折る指に洩れざりし吾安田家の、由緒素姓人に誇らるべき吾身に、天命とは言へ……嗟乎何たる事ぞ。と獨言ちつゝ三郎は、遽かに手を額に加へてホツと太息を吐きぬ。

頓て三郎は何思ひけむ寢衣の儘スツクと起上りて、裏手の非常口より忍び出でしが、見渡す東の空はやう〜茜さして、そよ吹く風いとど身に泌み渡りぬ。

十三

夜明けて後ち安田家にては三郎の姿見えぬに打驚きて一方ならず胸を痛めつ。奥の一間に家中の額をあつめたる折しも、訪づれたる松本の一時間許り何事かを密々語り終りて歸り去りたる後、遽かに奥へ召されたるお清は、今日中に此家を疊んで、明日の二番列車で皆岡山へ移轉す事になつたから、其積りで大儀だが大急ぎに取片付けてお呉れと、お袋様の口よりいひつ

つゝ良人の顔差し覗けば、松本は思はず安田と顔見合せ少し周章てたる調子にて、ウムそうか。コウ——と安田君、ちよいと君次の間へ外づして呉れ給へ。じゃあ此室へ、此室へお通し申してお呉れ。

十四

イヤどう仕りまして、今朝程は誠に失禮致しました。で何ですか安田君の居所は分りましたかね。席定りて一通りの挨拶終りたる後ち松本は、妻の汲むで差出す茶に喉濕ほして何氣なう言へば、茶色の被布の袂より鼻紙取出し、少し斜めに面を垂れて、茶釜髪を頭はせ乍ら鼻打拭みたる後ちお品は、ハイ段々御心配に預りまして有難うございました。イヤモウ俸の事なれば全然諦めて仕舞ひましたよ、全く妾が不運なんですからね。と投げつけたやうな調子に言差して、一寸ふり返りざまお民の横顔を眺め、ですがただ不憫なは此娘でございます。妾は實に可哀想で堪りませぬが、精根の底まで腐つた俸には、もう些とも未練はござりませぬから、却て

あの様な人非人に大事の此娘を添はせうよりは、外に相當なモット立派な婿を取つて死水を取つて貰ふ方が、妾にも安心でございますよ。と言ふにお民は思はず面をふり上げて、怨めし氣に叔母の顔打眺めぬ。

本當にどうもお察し申しますよ。だが又どう言う譯で安田君はあんなに……私はどうも合點が参りませぬ。と松本は吻と太息を吐いて言へばお品は思ひ出したやうに膝押進め、さればでございます。實は今朝程貴君のお話を承りまして、今更ら餘りの事に呆れ返つたやうな次第で、岡山の兄とも相談の上、もう俸もそんなに心が腐つたからは、迎も此儘一處に居る譯にも参りませぬから、一と先づ岡山の方へ此娘と一緒に歸る事に致しましたので、一寸お暇乞に伺ひました。誠にどうも色々とお世話になりました有難うございましたが、愈々明日の二番列車で、ハイ誠に早急な事でございますが、もう此地に居るのは一日も厭になりましたから、併し岡山へお光來の節には、どうか是非ともお立寄なすつて下さい。といふに、松本は驚きたる容子にて、オヤ明日の二番である岡山へ、では船越町のお宅はどう遊ばすお積りで。思はず膝乗出して尋

ぬれば、お品は沈着いたる調子にて、ハイモウあの儘で打棄つて置く積りです。どうせあの馬鹿奴が後へ何處かの馬の骨を引張り込むでせうから。冷やかに言放ちたるものゝ、流石愛着の羈絆の断ち難くて、せぐり来る涙を悟られまじと呑み込みつゝ、面を背けては鼻汁拭む真似して涙を拭ひぬ。

妾はちよいと此家の姉さんにお頼み申して置き度い事がござんすから、どうか一足お先へお歸りなすつと、お民は今しも會釋して立ち掛けたる叔母に断れば、では成丈け早うお歸り。明日が早いからね。と言ひつゝお品は玄關まで主人夫婦に送られて出で行きしが、程なう車の音門前に響きたる後ち、お孝のみ銀瓶片手に入り來りぬ。

姉様妾や悲しうてなりませぬ。とお民は濕みたる兩の眼許に無量の思を込めてお孝の顔を見上れば、本當にね、お察し申しますよ。と言ひつゝお孝は銀瓶を下して、ですがねお民さん、必ずこんな事でよくと御心配遊ばしますな。身體をお痛めなすつては御損ですからね。一寸妾も聞きました丈けでまだ委しい事は存じませぬがまあ何でござんすよ。あんな事などは能

く下世話にも申す通り、案するよりは産むが易いとかで、却て御心配程の事もござんすまいよ。ほんの貴嬢ちよいとしたお間違なんですからね。と言終りて又もや銀瓶を取上れば、ハイ有難う。と僅かに答へて暫らく黙したる後お民は少し膝を進めて、姉様、妾や今度岡山へ歸るのはどうも厭で厭で氣が進みませぬど、叔母様や父があつた通りなんで、どうも致方がござんせんから不本意乍らお暇致しますが、どうぞ此後ともに不相變お心易うお願ひ申し升。就きましては甚だ此様な事をお願申すのも何でござんすが、どうぞ妾が苦しい涙を呑んで岡山へ歸る本意ない思を、兄様にお會ひなされた時にお傳へなすつて下さいませ。まだく申して頂き度い事もござりますが、何だか胸につかへて申されませぬ程に、どうか何分にも宜しう仰やつて……と途切勝に言終りて、こらへず、ホロリと滾す涙に膝を濡しぬ。

十五

まだ交り初めてより半歳と経たねど、お孝とは十年の舊き昔馴染よりも更らに意氣合ひぬる

まゝ、又と得難き良き友よとお民も心の底より打解けて親しむ程に、いよゝ兩女の交情は睦じ
うなりて、今は眞の姉妹ぞと傍目にも思はるゝ許りなれば、お孝も切なきお民の心の中を思ひ
やりて、そゞろ貫泣に袖濡らしつ。様々に詞を盡して慰めし後、暫時はしめやかに語合ふ聲絶
えざりしが、頓て三時をうちたる時計の音に驚きてお民は、盡きぬ名残を惜みつゝ家路に就き
ぬ。

次の茶の間にて始終の様子を、手に取る如く聞き居たりし三郎の心根はそも如何なりしぞ。
窃と立ちては又坐りつ。忍びやかに溜息を洩らしては眼に手を當てつ。兩腕組み合すかと思へ
ば、また引裂けむ許り袖口噛み締むるなど。

X X X X X X X X

無事到着 仕候とのお民が手紙岡山より届きて後五日目の正午過ぐる頃、松本は安田と
共に神戸に行きて其夜出帆の南洋丸を待合はす間、とある旗亭に上りて惜しき名残をさかづき

に酌み換しつ。彼一語此一語、涙に語り涙に答へつゝ互にひそやかに語合ひ居たりしが、いつ
しか短き日脚も西山の端に沈みて、電燈の光り眩く點き始めしに打驚き、其儘汽船問屋に歸れ
ば、下僕は早や手廻りを店先に揃へて待受けて居き。

それでは随分君も御機嫌よう。兎角氣候不順の土地とか聞ける程に、必ず用心して健在で暮
して呉れ給へ。彼地へ行けばとて、土地こそ隔つて居れば便利悪しからぬ所ゆゑ、屹度繁々音信
して呉れ給へ。岡山の事は必ず僕から時々報らせるから。と安田の手を堅く握り締めて松本が
言へば、有難い、ア、實に忝けない。松本君、もう何も言はぬ。イヤ言ひ度い事もあるが胸に
逼つて何も言へぬ。僕は、僕はもう君と顔を合すのも、現世にてはこれで終かと思ふと、寧そ
此胸も張り裂けるやうで……満身の力を手先に込めて、松本の手首を堅く々々握り返しつ。面
を背けて涙に噎び込めば、松本も思はず男泣きの涙を滾しぬ。

錨巻き上ぐる音、汽笛の聲。偕ては船員のがやく罵りて甲板の上を走り廻る音の稍静まり
たる頃、車輪の水切る音のみ獨り船底に響き初めて、八重の潮路を蹶立てつゝ南洋丸は濠洲へ

向ひぬ。

評 長篇大作、近來稀に見るところ、むしろ「文庫」誌上に於ては、空前といふべし。而して長き割合に、ダレ氣味少く、マカリ少く、濃艶と淡宕と鹽梅宜しきを得て、讀者を倦まざらしめたる、容易の業にあらず。文句往々にして鏤琢の痕ありと雖、これ苦心經營の餘り、技に忠なるの至すところ、咎むべきにあらず。實にこの一篇には幾月を費やしたまひけむ、書き流しの短篇を、そのまゝに投函して記者に淨書の役を勤めさせたまふ寄書家多き世に、精力實に感ずるにあまりあり。(烏水)

然れども難は言はざる可らず。安田が「女の羨やむばかり」の好男子にして、その狎妓染吉が「男好のする瓜實顔」とはあまりに現金の品物なり。安田の宅にて來客の出入ある毎に、妻君と下女と二人して「洋燈を式臺に持ち」出すこと、四五度書かれたれど、これは何とか省略ありたし。お民が夢の場、何の干繋もなし、あらずもがな。松本といへる人、余は初めより胸に一物、荷物の安田を反間苦肉の策にて厄介拂ひにする淨瑠璃文句そのまゝの人物とおもひるたるに案外なりしは、吾眼の

僻めるにや。

(烏水又曰)

又曰、癩病患者を主人公にしたるは、露伴の「對髑髏」を嚆矢とす。(明治の小説にありては)近ごろ柳浪が「國民之友」に出したる、何とかいふ小説にも、同じ筋のが見えたり。いづれもその病の系統あるは麗はしき女にて、露伴の作殊に幽玄恠奇ともいはゞいふべし。柳浪の作に至りては糊塗懊惱平生に似ず、いたく劣るところありしとおぼゆ。この作、前の女を男の患者にして目先を變へたれど新意匠とはいひがたし。

(烏水又曰)

誌上に作者(天眠はさきの証吉)の名を見ざること數月、「文庫」一好作家を失ひしかと惜み居しに、今此の篇を得て此の間苦心のある所を知りぬ。一篇の「宵月夜」まことに幾許日の苦心經營を以て成りけむ。誌上近來の偉觀として誇るに足る。吾人はまごゝろより、其勞を謝し其功を喜ぶなり。

烏水が贊美の言はわれ全々異議なし。批難の語中松本云々は、寧ろ其が僻目なるべくして難にあらずと思ふ、他はすなはち白壁の微瑕のみ。

(白蓮)

明治三十一年六月五日發行、雜誌「文庫」第九卷第六號所載・ペンネーム 天眠

註「宵月夜」を掲載せる雑誌「文庫」の表紙に掲出して曰、「材を人生最悲惨の事に取
りて、母と、妻と、友と、四様の涙あり。描寫慘憺、愴惻人を動かす。此篇作者數
月の苦心經營を以て成れるものにして、實に誌上近來の大作、寄せて江湖の月旦を
乞ふもの也」云云。

附
その頃を語る

四十とせ前

二三四



その頃(二十三、四歳)と
還暦當年の著者



!!!天佑社の株券は藤島武二氏の原畫、伊上凡骨氏の彫刻、木版八度刷の鳥の子紙、といふ斷然異彩を放つたもの云々(第二六〇頁記事参照)



專務取締役 梅次 浩
株主 河野與助 職

拾株券 金五百圓

一資本總額 金拾萬圓
一全株式數 金五拾圓
一設立登記 大正七年七月廿八日

右記名者ハ當會社ノ定款ヲ遵守シ當

會社株式ノ内拾株ノ株主ナルコトヲ證

スル爲メ此株券ヲ交付スルモノ也

此株券ヲ賣買譲渡セシムルキハ當會

社ニ持來シ裏面ニ證印ヲ受クベシ

株式會社天佑社

專務取締役 梅次 浩



一、「丁稚修業」の頃

私が文學少年になりました動機と申すのは、姫路の小野寺隆之助といふ赤穂義士小野寺十内の末孫である叔父が、當時その兄にあたる明石の小野寺秀太の醫院で醫學修業中、小學生の私に、「里見八犬傳」や、「白縫物語」などを讀ませて呉れたのに、芽生えたのであらうかと思はれます。その後姫路中學へ進みましてからは、露伴先生の「露團々」や「一口劍」や、紅葉先生の「南無阿彌陀佛」や、「伽羅枕」などを讀むだやうに思ひますが、自分で美文の眞似事を書くやうになつたのは、中學を出て大阪へ參つてからであります。

その頃は、神戸にもまだ中學校のない時分でしたが、將來醫者になる積りで姫路中學に入つた私は、健康が許さないので大學へ向ふ針路を大阪の實業界へ轉じ、丁稚となつて五年有餘修業したのでありますが、申す迄もなく大阪は、由來吾國商業の中心都市であつたものゝ、現

在からみると、實に隔世の感がある程すべてが幼稚で、又呑氣なものでありました。

只今から四十六年以前の話でありますから、まだ水道も電話もなく、電燈も一般家庭まで普及せず、ランプを用ゐて居た時代でありましたから、火屋を破らぬやう、石油を滾さぬやう、燈芯を歪めずに切るやうなどと、先づランプ掃除の稽古を始めとして、雑巾がけに、風呂焚きに、その風呂の水は、土佐堀川や横堀川等へまで汲みに行く。又仲仕の代りに荷造りをして、その荷物を川口、安治川、木津川へまでも運ばされる。かと思へば、豆腐屋八百屋への使ひ歩きから、厨房のお三どんの仕事まで手傳はされる。番頭さんには勿論その従僕のやうにこき使はれ、一つ間違へば算盤で頭をぶん殴られる。而かも粗衣粗食は船場商家の特徴で、かの「京の三條室町聞いて極樂行て地獄」と謡はれた京都の商家の、夫れに對比すべきものでありません。

私は最初、明石の叔父の縁故續きである西村様の紹介で、呉服問屋××商店へ半年程お世話になりましたが、肺患の令嬢の看護を手傳はねばならぬ破目となつたのに辟易退店して、西

村様の店へ戻り、其處で手傳うて居る中にすく／＼と五年間ほど實習させて貰ひました。初春公に××商店へ参る時、丁稚の適齡資格を作るために、年齢を二つ下の十五歳と偽つて参つたのでありますが、先づ驚いた事には、主婦の手で得度されてクルクル坊主にされ、雪駄を穿いて餓頭笠を冠らされた事であります。

その當時の中学校といへば、社會的に只今の専門學校位の程度でありましたから、中學生と雖も中々生意氣で、酒も飲めば煙草も吸ひ、盛んに天下國家を論じ合つて居たもの。それに引きかへ坊主頭に餓頭笠の丁稚姿で、日傘をさして歩く無帽の手代さんのお供となつて、商品を積むだ丁稚車を曳き、大阪全市内から堺へまでも出掛けて得意廻りをする。無論無給で、休日是一年間を通じて僅に五六日といふ有様。こうした境遇の激變は、少年の身に可なり辛い事で、豫て覺悟を決めた堅忍不拔の志も、幾度か挫折せむと致しました。

西村商店へ歸つてからは、毛布問屋であつたので、春より夏へかけての半年間は殆ど閑散で

あり、それがまた私に取りては非常に嬉しい事でありました。と申すのは好きな讀書が出来
るからです。先輩や同僚間には偏屈者扱ひをされましたが、悪い方面への誘惑を避け得られた
のは、全く趣味を文學に持ち、時間の許す限り讀書に親しんだためであると思ひます。

私が當時の勉學としては、早稲田専門學校校外生として、文學部の講義録（毎月三回發行三
簡年修了）を學ぶ他に、宇田川文海氏等の新聞小説を毎日々々克明に筆寫して、文字や文法を覺
えた事もあり、また英語を學ぶためには梅花女學校や浪花教會で、一週二回バイブルと會話を
一時間宛といふ風にして、米國婦人のコルビー先生やケース先生等に。安土町の教會では林先
生、籠屋町教會では寺澤先生の夫人等に教へられました。店の閑散期を利用したのではありま
すが、よく理解して許された西村商店の御主人には、心から感謝した事があります。

二、「文學少年」の頃

私の書いた小説——と言ふのも烏滸がましいが、各雑誌に發表されたものは三十篇ほど

あつたかと記憶します。その全部が私の結婚以前の二十歳から二十四五歳までの、お耻しい
がまだ異性を知らない時代の作品であります。それでゐて大膽にも男女關係や、花柳界の事
などをも可なり突込んで書いて居ります。が、その種を明かせば店の先輩に根掘り葉掘り質問
して、恠氣交りの情話などを聞かせて貰ひ、それに想像を加へて書いたもので、四十の星霜を
経過した今日、古色蒼然たる雑誌を書架から引張り出し讀み直して見ると、苦笑微笑の續出を
免がれ得ぬのであります。

創作の原稿は、半紙を四つ折にして膝の上に乗せ、心齋橋筋に面した店頭で手紙でも書くか
のやうに粧ひ、眞書筆で細記して居ましたが、二十四字詰め三百行位のものならば、三枚位
に書き込まれたものです。その當時には指先に筆だこが出来る位の熱心さで、少し膏が乗つて
筆が順調に走つてゐる最中に、半夜燈の電燈がパツと消えると、裸蠟燭を點じて書き續ける。
着想が半途で頓挫した時には、折みし雨の夜すがら濡れに濡れて中の島公園や、或は櫻の宮邊
へまでも足をのばして歩きつゝ想を練つたものです。そうした萬事不自由の頃が、私に取つ

ては最もよく書き得られた時のやうに思はれます。

それから、その書いたものを乍らと申しますと、其の頃文學少年の間で盛んに讀まれてゐた文學雜誌、東京博文館の「少年文集」や山縣悌三郎先生經營の少年園發行の「文庫」などに、投書したものであります。

此の二つの雜誌は、當時少くとも文學に關心を持つ程の少年達は、すべて夫れを中心として活躍したものであります。と言ふわけは、「少年文集」も「文庫」も、共に全國のかうした文學少年どもからの投書ばかりを掲載して居る雜誌であつたから

何分原稿が活字になる機會の少かつた其の頃としては、これらの雜誌に自分の作品が載るといふ事は、私達文學少年に取つてどれほど大きな喜びであつたこととせう。それは何物にも代へ難い愉悅であり、又興奮でもありました。だから、此の二つの文學雜誌「少年文集」と「文庫」からは、後年文壇に名を馳せた大家連を、相當澤山に出して居ります。

私も小林天眠といふペンネームで、明治二十九年四月發行の「少年文集」に、ナショナルリーダーから購案して書いた「難破船」といふ小説が入選して、賞品に帝國文庫を四冊貰つたのを手始めに、數回入賞しましたが、就中「姫路染」といふ歴史小説は、姫路地方のかちん染といふ傳説を骨子に、全然架空な事を書き綴つたものですが「地賞」に入選して舶來の雙眼鏡を買ひ、逆も嬉しかつた事を覚えて居ります。その時中村吉藏君は「天賞」になつて、舶來の金側時計を買ひ、いつも兵兒帯にぶら下けて居つた事は、同人間に今もなほ、有名な語り草となつて居ります。博文館の「少年文集」は菊判の體裁の良い雜誌で、殆ど懸賞募集の投書ばかりを載せて居りましたが、それと對立した「文庫」は、四六倍判の頗る簡素な雜誌で、この方は懸賞募集でなく普通投書ばかりを、數名の記者が選んで批評を付け掲載したものであります。言はゞまあ文學少年の眞剣な道場のやうなものでありました。そして其の記者たるや經營者の山縣氏から囑託された地方屈指の文學青年でありまして、原稿を東京からそれへ廻送されて居たやうでありました。

新體詩擔當の記者河井醉茗君は、堺の呉服屋の若い主人公であり、また、小説や紀行文擔當の記者小島烏水君は、横濱の正金銀行員でありました。

烏水君は、最初「文庫」の投家書であつたのが、其の才筆を認められていつの間にも昇格された人で、その頃博文館の大橋乙羽氏が、洋行記念に出版した「千山萬水」とかいふ書物が、餘りにも贅澤な装幀だつたので、烏水君すつかり旋毛を曲けて了つて「文庫」誌上に有名な諷刺家齋藤綠雨氏の別號正直正太夫の名を擬つた「柏子木丁太夫」といふ變名で、完膚なきまでこき下しました。それをまた乙羽氏が平氣で再版の際、他の贅辭澤山の批評文と一緒に書物の奥へ載せたものです。それには流石の烏水君も、頭を搔いて、氏の雅量に服したことがありました。

此の雑誌「文庫」は明治二十八年頃「少年文庫」を改稱したもので、二百號以上も續きました。紙幅は先程記しましたやうに、四六倍判で、八十數ページを計へ、定價は十錢でありまし

た。誌上に掲載の作品は、その優劣に由つて、題名の活字が大きくなつたり小さくなつたりし、また本文の末尾には、記者の批評を添へられたことは既に申しましたが、その批評は六號活字で附けられて、深切に指導を與へられたものであります。

そして雑誌の表紙には其の號に掲載せる代表的作物數篇の題名と、作者の名が印刷されてあるので、私どもは其の頃、月二回の発行日を待ち兼ねて、よく本屋の店頭を覗きに行つて、自分の投書の題名が表紙に掲載されてあるのを見ては、何とも言へぬ喜びを感じ、胸をわくわくさせたものであります。

明治三十一年六月発行の「文庫」には、薄田泣菫さんが二月（昭和九年）の中頃に、大毎の學藝欄に紹介されました故横瀬夜雨君の、

お才あれ見よ筑波の山に

霧がかゝればさびしいものを

お月さまさへ十三七つ

お父こふるが無理かいな
 云云の有名な詩が、酔茗、烏水兩氏の批評つきで載つて居りますが、同號に私の「宵月夜」といふ小説も載つて居り、その表紙には「實に誌上近來の大作、寄せて江湖の月旦を乞ふもの也」と特別麗々しく書き出され、記者の烏水君と五十嵐白蓮君との批評にも、大變に褒めて頂いたのでした。所謂過褒當らずではありませんが。

三、その頃の私の作品

これらの拙い作品は、前後約三十篇と前に記して置きましたが、何分年處を隔てたむかしのことで、多くは散逸し盡くし、近頃やうやく蒐集し得たものだけを、列記すると左の通です。このうちから舊時を語るお笑ひ草に、本書に掲載しました十二篇は、その題の上に○の印を附しておきます。

題	發表	時
○ 雛破船	少年文集第二卷第四號「地賞」	明治二十九年四月十日
菊 松	少年文集第三卷第三號「地賞」	明治三十年三月十日
沖の石	よしあし草第一卷第一號	同年七月十八日
野 嵐	文庫第六卷第三號	同年七月二十日
關 雲	少年文集第三卷第十二號「天賞」	同年九月十日
○ 涙 川	文庫第六卷第六號	同年九月二十五日
巴 塚	文庫第七卷第二號	同年十月五日
女 郎 花	文庫第七卷第三號	同年十月二十日
○ 蛇 袴	文庫第七卷第六號	同年十二月五日
○ 姫 路 染	少年文集青年文藻上編第四卷第五號臨時増刊「地賞」	明治三十一年四月二十日
○ 宵 月 夜	文庫第九卷第六號	同年六月五日
○ おく 霜	少年文集第四卷第八號「地賞」	同年七月十日
むら 雨	よしあし草第八號	同年八月二十七日

- 狭 霧 青年文第一集 同年九月十五日
- 地蔵ヶ辻 文庫第十卷第五號 同年十月二十日
- (合作小説) 雲かくれ よしあし草第九號 同年十一月三日
- 迷 ひ 路 よしあし草第十四號 明治三十二年五月二十五日
- あだまくら 文庫第十四卷第二號 明治三十三年二月十五日
- 二枚笈摺 關西文學第一號 同年八月十日
- 宮 島 曲 新小説第五卷第十二號 同年九月二十五日
- 落花流水 第一位當選(二九五點) 明治三十四年七月九日
- 萬朝報第二百廿二回第一等

その蒐集に就いては、河井醉茗君始め舊知の親しい方々から借して戴いたり、古雑誌の目録にあるのを買ひ求めたり。同じ買ひ求めたにしても面白い思ひ出のあるのは、「宮島曲」の載つてゐる「新小説」で、これは大正十二年のころ、當時まだ發行されて間のない雑誌「文藝春秋」が、讀者に對するサービスとして、無料で書物の紹介など誌上でしてゐられたのを利用し、

その欄へ斯くくの雑誌を一部五圓で譲受けたいと廣告した。その廣告を見て廣島の人から送つて貰つて、やつと手に入れることが出来ました。ところが、今日まで種々苦心して探しても什麼しても見付からず、まことに心残りがしてなりません。小説に筆を斷つた最後の作品である「縁切坂」と題する短篇です。この小説は明治三十五年十月、播州の山田松琴君といふ人の編纂してゐた雑誌「新文海」に載せたものですが、これはその作の巧拙如何に拘はらず、私として結婚後に、初めて男女の心理や情緒を叙したもので、當時どんなことを、どういふ風に私が書いたかを、結婚前、人聞きや想像や、憶測ばかりで、實際は何も知らずに書いてゐた作品と對比して讀めば、さぞ面白からうと思はれてならぬのであります。

四、「よしあし草」と「關西文學」

却説、かうした文學修業に少年らしい愛身を費して居ります中に、この「文庫」「少年文集」の兩雑誌の投書家で、大阪に在住して居る人達が寄り集つて、一つの文學團體を作りまし

た。夫れが「浪華青年文學會」であります。第一回の會合は、たしか明治三十年四月三日、難波の翁亭で催されたやうに覺えて居ります。

此の浪華青年文學會の發起者は、高須梅溪(芳次郎)君中村春雨(吉藏)君山川延峰(傳之助)君等の數名で、都合十七名の會員が集りました。私も其の一人でありました。

何分にも其の頃は、誰もがまだ世慣れない純真な少年時代で、殊にいつれも初めての顔合せでありましたから、皆温順しく煎餅をかじり澁茶を呑むで、文學談をやつて居りますと、圖らず基督信者の中村春雨君と、日蓮信者の山川傳之助君との間に、猛烈な宗論がオツ始まりました。

兩君は口角泡を飛ばせ額に青筋を立て、互に一步も譲らず激論をつづけ、仲裁をしても中寄せ付けないので、一同ほと／＼困つて了ひました。すると其の時突然室の一隅で朗々と詩を吟じ、立ち上つて劍舞を遣り始めた人がありました。それは河野豐藏君でありました。同君は晩年大阪朝日の廣告部に入り程なく歿しましたが、可成り飄軽な男でした。其の時も尻ビリ

腰で「……途中大便を催はす……」と言つたやうな、滑稽な劍舞だったので、一同思はずドツと笑ひ出し、爲めに流石頑強？な兩君の論戦も漸く鼻がついたのでした。

爾來三十餘年を経たる昭和九年の三月の末に、山川君は文學博士の學位を貰ひましたが、其の論文は矢張り日蓮に關するものだとして聞いて居ります。一方、相手方であつた中村君も早稻田大學で、坪内博士の講座を繼いでゐる關係上、學校當局からの勸告もあるので目下學位論文を書いてゐられるやうですが、これはあの時の宗論に關係のない、演劇に關するものゝやうであります。

其時の會合で申合せまして、其後毎月一回、十日の夕刻から例會を開き、春とか秋とかに大會を開きました。例會の會場は大阪市内淡路町の龍泉寺と、後に安土町の書籍商事務所とで遣りました。大會は濱寺、奈良、垂水、箕面、北野の朝妻、神戸の山手俱樂部等で開いたと記憶して居ります。

そして第一回會合の四箇月目の明治三十年七月に、初めて機關雜誌「よしあし草」の第一

號を發行致しました。其の第一號には中村吉藏高須梅溪の兩君が論文を、田口掬汀君と私が小説を載せて居ります。

當時の中村君は、現在早稻田大學教授の西村眞次博士や、閨秀作家北村兼子さんのお父さんの北村香骨氏等と、島町の實業學館といふ夜學校に寄宿の傍ら、晝は高須梅溪君と共に八軒家の郵便管理局へ勤め、月給十圓の雇員をやつて居たものです。實業學館と申すのは今の成器商業學校の前身で、郡山の藩士土井晋吉氏が最初金二圓の資金を以て、淡路町の龍泉寺の一室で開き、桂公爵の姻戚に當る土井氏の奥様が英語を教へられ、松瀬青々宗匠や、軍人となつた××中將や、齋藤弔花君等もその頃の學生で、西村博士の如きは入學願書を原紙に書いて出したといふ面白いお話も種々聞いて居りますが、長くなるので割愛致します。

當時の浪華青年文學會の會計簿を、一寸披いて見ますと、

出 十錢 會場小使へ心付、 出 三十八圓 中西活版所拂、 入 十錢 某君會費、 入 八圓〇五

錢 神戸支會、 入 五十八錢 前垂會、 入 十五圓 小林中村堀部寄附、 出 廿錢 例會菓子代などと書いてありますが、中村堀部私の十五圓の寄附と言ふのは、某銀行宣傳冊子作成の懸賞募集に應じ、三人が協力して原稿を書き（私は短篇小説を書いたやうに思ひます）、それが當選して得た賞金を寄附したもので、前垂會といふのは船場の商店の小店員十數名の俳句會の名であります、會員の過半はモウ故人になつて居るやうで、生残りの人々は頭が禿けて、孫が出来てゐる連中でありませう。

なほ文學會の會員の名を、今までに申上げた人達を除き、少しばかり記憶してゐる中から申して見ませう。

芦葉園の内藤滴翠君、大阪市議の大槻吉平君、西本虎仁君、大阪貯蓄銀行の堀部周三郎君、俳人野田別天樓君、故人水落露石君、早大講師と爲つて歿した石割松太郎君、大阪朝日の上野社長、J O B Kの廣江常務理事(故)、元大毎の奥村梅臯君、詩人の溝口白羊君、故人三村秋蚕君、倫敦在住の清水嘉三郎君、住友銀行の小西梅太郎君、岩橋繁男君(故)、

堺の市議宅雁月君、河野鐵南和尚、晶子さんの弟(君死にたまふ事勿れ)の鳳宗七君、神戸の平忠宣君(故)、故一色白浪君、齋藤溪舟君、大阪朝日の記者であつた増谷利芳君、關西日報主筆であつた吉田笠雨君、

播州北條(私の郷里)の三重商工銀行頭取三枝半治郎君、故人山田松琴君、姫路鷺城新聞の尾高巖鐵君、故人小崎柿堂君、大阪商船重役の渥美育郎君、和歌山の川北麗亭君、元稅務署々長の宮本富士一君、沖野岩三郎君、

岡山の醫學校の學生であつた伊藤一郎君、逢坂藍水君、故人窪田勤君、三吉野本店の藤澤愚葉君、京都の醫學生伊良子清白君、前田節君、(こゝはお國を何百里)の作者故人眞下飛泉君、林田撫水君、大原野神社の宮司大釜菰堂君、也阿彌ホテルの六里巽(吉岡彌太郎)君(故)、越後の相馬御風君、東京の鮫島大俗君、ドクトルの勝文平君等、等、等、

會の機關雜誌「よしあし草」も後年世に知られた大家連の卵を、可成り大勢その誌上に集めて居りました。確か與謝野晶子さんや永井荷風さんの處女作も、この「よしあし草」で世に出したと記憶して居ます。晶子さんの方は鳳小舟といふ名で、三十二年二月號に新體詩「春月」

を。荷風さんの方は三十三年一月號に、處女作と思はれる小説「濁りそめ」を發表してゐます。かうした雜誌を中心に會員のめい々が、文筆への精進をつゞけて居ましたが、その頃東京の「萬朝報」が毎週一篇宛、春陽堂の「新小説」が毎月一篇宛、懸賞小説の募集を行ひ、入選の作物を發表して居りましたので、私も驥尾に附し「萬朝報」に「落花流水」を、「新小説」に「宮島曲」を寄せて各入選致しました。その賞金は十圓でしたから、當時にありては相當の書籍が買へるので、吾々文學少青年共は、随分皆努力して書いたものであります。恰もその頃、大阪毎日新聞社が募集した懸賞長篇小説に、會の同人中村吉藏君が「無花果」を書いて見事當選し、其の賞金三百圓を携へ東上して早稲田の文學部に入學致しましたが、中村君に取つては此の「無花果」が、取りもなほさず君の出世作となつたわけであります。も一つ當時の出來事で、未だに覚えて居りますのは、私達仲間の小石青麟、河野豐藏、高須梅溪の三君が、大變な意氣込みで一緒に小學教員の檢定試験を受けたところ、今は大學の先生になつて居る梅溪君一人だけが什麼したことが意外にも落第致しました。これに同君は大に

憤慨して、大阪を捨て、東京へ奔り、只今の新潮社の前身佐藤橋香君經營の新聲社に投じた事
であります。

かうして梅溪吉藏の兩君に、續いて西村中山の諸君等が相前後して東京へ去つて了つたので、
その後の雑誌の編輯は、主として堀部君と私が當つて居ましたが、其の時分此の「よしあし
草」に對する唯一の好敵手は、心齋橋の書肆文淵堂の主人金尾思西君がやつて居た文學雑誌
「ふた葉」後に改題した「小天地」でありました。これと「よしあし草」との二雑誌が、大
阪に於ける文學少年仲間を兩斷して、對立して居た譯であります。「ふた葉」には薄田泣菫君
や青木月斗君などが、盛んに書いて居ました。

處が吾々の「よしあし草」の方は、前にも一寸申した通り、中村君や高須君が郵便局の腰辨
の末班であつたと同様、會員の多くはまだ部屋住みの連中で、金廻りがよくない。これに反し
「ふた葉」は發行元が當時有名な文淵堂で相當の資本をかけるので、金づくでは什麼にも太刀
打ちが出来なかつた。併し雑誌の内容としては寧ろ反對に「よしあし草」の方が潑刺たる精彩

を放つて居たやうに、面々は自信を持つて居りました。

吾々仲間が其の頃、いかに懐ろが寂しかつたかに就いて、面白い一つの話が残つてゐます。

それは當時「よしあし草」の印刷をやつて居たのは、中西活版所だつたか矢尾活版所だつたか
忘れましたが、高須君が其處へ校正に行つた時蝙蝠傘を忘れて歸つたが、印刷代の借りがあ
るので、夏の炎天に、欲しいその蝙蝠傘が取りに行けないで、往生して居た事であります。

當時に於ける私達の仕事として一言申上げて置きたいのは、商業都市の大阪において文藝
講演會の皮切りを試みた事であります。それは明治三十二年七月一日、土佐堀の青年會館で、
今は作州に歸つて醫院を開いてゐる中山泉庵君が「文學は精神的宗教也」を、今の立正大學の
山川延峰博士が「社會革新の動機としての文學」を前講として、米國哲學博士湯淺吉郎氏が、
「ミルトンの失樂園に就いて」と題した講演をせられました。聴衆は六百名程で、大阪に於
ける最初の文藝講演會としては、大成功を収めました。

なほ講演會としては、後に述べます天佑社の株主第二次募集に際し、大正二年四月五日同じ

く土佐堀青年會館で開催して居ります。其時の講師と演題及びその順序は、

開會の辭

中村吉藏君

新らしき文藝

茅野蕭々君

文藝に對する誤解

厨川白村君

世界の大作

宮川經輝君

尺八獨奏

中尾都山君

(休憩)

藝術の刺戟

齋藤弔花君

大阪文藝の今昔

木崎好尙君

演題未定……であつたので何であつたか失念しましたが……

菊池幽芳君

文藝と趣味

上田 敏君

とプログラムにはありますが御病氣のため代理として……

赤松智城君

演題はたしか「生きむとする意志」であつたかと思ひます。それから

囚はれの解脱

白川鯉洋君

游歐雜感

與謝野寬君

以上で午後四時から始め夜十一時過ぎまで続けましたが、其の中間の休憩時間中に聴衆は會場内で餅や、饅頭や辨當などを喰つて又傍聴しつづけたといふ熱心さで、頗る盛會でありました。其の時の聴衆中に、宇田川文海老が白木綿の切れで、顎を吊るして居られたお顔の見えた事を、今だに覚えて居ります。

明治三十二年に「浪華青年文學會」を「關西青年文學會」と改稱し、翌三十三年に「よしあし草」を「關西文學」と改題しました。その改題第一號には私の拙い小説「二枚笈摺」が卷頭に載つてをりますが、何しろ雑誌の表紙畫は當時の新進畫家中村不折氏の揮毫(本書見返し表、参照)に成り、皆が現今の言葉で謂ふ更生の意氣に張り切つたものであります。

五、出版會社「天佑社」の事ども

ところが、物必ず始めあれば終ありで、せつかく斯様に陣容を整へた「關西文學」も、遂に

翌三十四年二月に廢刊のこととなりました。誌齡は「よしあし草」から起算して三十有三號を算し、またその會は當時大阪以外、各地に十數の支部や支會を持ち、會員の數は千二百を計上してゐたのです。たとひ會員の誰れもが各々の一身上の都合から居家處世の急に迫られてその暇がないため、雜誌は廢刊するにしても、これだけ骨折つて纏めて來た會をこのまゝムザムザ解散して、會員が永久に離散して了ふことは、いかにも残念である。暫く隠忍して文學に遠ざかるにしても、他日各々が社會的に夫れくの地位を築きあげた上で、更らに捲土重來、文學運動を起そうじやないか、それには將來文士の立場を擁護するため、理想的の出版會社を興すに若くはないと言ふ意見が多數であつた。

そこで、中村堀部兩君と私の三人が理事となつて、會員中の有志者百名近くを株主として、明治四十三年一月から百箇月間の積金を集めて、九年後の大正七年に資本金十萬圓の株式會社天佑社といふ出版會社を創立して東京へ乗り出しました。京都帝國大學文學會編の「國語國文」第七卷第十二號(昭和十二年十二月發行)の誌上、藤田福夫氏の「關西青年文學會の全

「貌」と題する論文の一節に、

……この文學會から出て學界、文壇に活躍されてゐる人々は、既に名を示しただけで十分であるが、實業界に入られた人々は又その方面で成功を収めて今日に至るまで活動をつづけ文化的事業への後援にもつくされてゐる。殊に記憶すべきは小林氏を中心とした株式會社天佑社は、大正七年三月この文學會系の人々の百ヶ月掛金が終了したので、それを資金として創立せられたもので、東京に出版業を營み、「抱月全集」「モーパッサン全集」等百數十冊の文藝書類を刊行した。(震災にて解散)これは言はず關西青年文學會の實業界への變貌であり、昭和の今日では文學會、天佑社共に社會から姿をかくしてしまつてゐるが……花と咲いた日の新詩社の追憶と共に、さうした老熟せる人々の口に依つて鞍馬寺の冬拍忌(與謝野寛氏)あたりで物語られてゐるのである。

と記述されてゐるのが、ありのまゝに這間の消息を叙せられたものに外なりません。想起しても今なほ愉快に感じますのは、此の株式會社天佑社なるものゝ株券(本書挿入圖版参照)でありま

す。これが發行された當時の大阪毎日新聞の一隅で、薄田泣菫君の筆らしい六號活字の數行の文に、

……天佑社の株券は藤島武二氏の原書、伊上凡骨氏の彫刻、木版八度刷の鳥の子紙といふ斷然異彩を放つたもので、例令會社が缺損をして無財産になつても、その株券だけで拂込金の價値が十分にあるから、株主は少しも損をせぬだらう。

といった意味を書かれました。こんな藝術的な株券は佛蘭西に一つあるくらゐだとかで、他に例がないとまで云はれますが、これも「文學少年」時代の延長の一産物と見らるべきものでせう。なほ天佑社と相前後して東京に旗上げしたものに、久世君の大鏡閣と、金尾君の文淵堂があります。當時東京における此の三つの新興出版業者が、偶然にも期せずして、いづれも大阪出身者であつた事は、不思議なやうにも思はれます。

その頃、金尾君が東京での仕事ぶりは實に熱心なもので、永らくの間、獨身生活をつづけ、

徳富芦花さんの原稿が貰ひ度さに、麴町の平河町から、毎朝缺さず淺草の觀音様へ朝参りした事や。私共仲間の一人で終りに「關西文學」の編輯を手傳つて貰つた三阪水鏝君が、學校の先生だつた關係上、雑誌への投書に本名を書く事を憚り飛鳥みち子といふ女性の筆名で屢々美文を發表したのだから、盛んに女性仲間から文通があつて、終ひに小栗風葉氏の妹さんからの如きは、可なり眞剣な手紙が來るので其始末に困つて、たうとう飛鳥みち子を病死した事にして臆を付けた事や。曾て伊良子清白君が大阪へ遣つて來た時、私達と會談する場所に故人淺井溪水君が、知り合ひのさる若い綺麗な未亡人の宅の二階の一室を借りて呉れたので、其處で會談中、其の未亡人の監督者の怖い小父サンが不意にやつて來たとかで、淺井君が吃驚して二階から屋根へ逃げ出し、取り殘された伊良子君と私が眞に困つた事や。電話交換手から、身を起して名を成した某閨秀作家をめぐる逸話など。

その他當時の思ひ出としては多々残つて居ますが、その面白さうな話は戀愛問題なども擲んで居りますので、どうも發表を遠慮せねばならぬ事が多いやうでありますから、先づ此邊で失

禮する事として、只今座右にある明治三十二年の年賀郵便發送芳名簿と昭和十二年一月現在の夫れとを對照して、その異同を檢じ、此の思出話を終る事と致します。

四十年來消息を續け居るもの

二十八名

死去されたるもの

四名

消息を絶ちたるもの（大半は故人？）

三十六名

合計 一〇四名

附記 此の一篇は、昭和九年四月、「文學少年時代の思ひ出を語る」と題してJOB Kにて放送せし原稿に、昭和十三年一月 商業興信所日報に載せたる「丁稚修業時代の思ひ出」中の一部、及びその他二三の事項を追加して起草せるものなりとす。

大尾

昭和十四年八月廿五日印刷
昭和十四年九月六日發行

非賣品

不許複製
限定版

著作兼發行者 小林 治

大阪市東區備後町四丁目三十五番地
京都市上京區室町上立賣下ル裏築地町

印刷者 改善社 瀧本 恭治 郎
大阪市西區阿波座下通二丁目

終

